

外国人留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションに関する考察 －京都「国際学生の家」を手がかりにして－

An Analysis of Intercultural Communication between International Students and Japanese Students: From Fieldwork in Kyoto International Student House

平 野 亮* 張 靖 舫** 松 崎 康 祐**
HIRANO Ryo CHANG Ching-Hsuan MATSUZAKI Kousuke

岡 田 翔 太** 八 木 翔 汰**
OKADA Shota YAGI Shota

In conjunction with recent globalization, the number of foreigners living in Japan has hit a record high. Communication between international and Japanese university students, however, tends to be poor because of differences in language, customs, culture, etc. This study analyzes the case of Kyoto International Student House (Haus der Begegnung) and how it is furthering intercultural communication between international and Japanese students. What can be surmised through interviews with house parents and some students who are living together at Kyoto International Student House is the important roles of the house "system" and third parties in facilitating intercultural communication. Interviews at the time of admission to the house and common meals create opportunities systematically to enhance intercultural communication between students. In addition, house parents were a major factor in encouraging communication with students as third parties. House parents did not intervene instructionally to provide direct guidance to students. Instead, they built a multi-faceted relationship, sometimes acting as grandparents toward grandchildren or parents toward children, and sometimes holding discussions with students as members of equal standing in the house. This is different from the traditional top-down teacher-child relationship. This study suggests that to promote intercultural communication between international students and Japanese students, rather than dealing with the problem as one between two parties, there is a possibility that it is more effective to methodically incorporate the system and third parties to build multi-dimensional relationships between the third parties and students.

キーワード：異文化コミュニケーション、ハウス・ペアレンツ、教育的介入、教育関係、共生

Key words : intercultural communication, house parents, instructional intervention, educational relationships, Life Together

1. 問題の所在

グローバル化の進展に伴って国際的な人口移動が増加している。2023年には、日本においても在留外国人数が過去最高を記録した（出入国管理庁、2023年10月13日）。海外留学生も、2020年の新型コロナウイルス感染症の世界的流行前の7年間で連続して増加し、2019年には30万人を突破した（文部科学省、2023年3月7日）。コロナ禍の期間にその数は大幅に減少したものの、総理大臣を議長とする教育未来創造会議は、今後ますます「高い志を有する優秀な外国人留学生の戦略的受入れを推進」すること、「多様な文化的背景に基づいた価値観を学び理解し合う環境創出のために受入れ地域についてより多様化を図る」こと、さらには、「留学生比率の低い学部段階や高校段階における留学生の受入れ」を促進することを提言した（教育未来創造会議、2023年

4月27日）。このように、これからも日本においては留学生と日本人が接する機会はますます増加することが予想される。

一方、日本の大学における外国人留学生と日本人学生のコミュニケーションは決して活発とはいえない。兵庫教育大学でも、授業や行事等で外国人留学生と日本人学生が異文化コミュニケーションをはかる機会が大学側から積極的に設けられているが、交流が活発化しているとはいえない現状である（兵庫教育大学学生委員会、2022年3月、19頁）。そのような事態は多くの先行研究においても指摘されている。

一因としては、言語の違いを筆頭に、文化、生活、食事、宗教観等、様々な要因から異文化コミュニケーションに消極的な学生が多いことが挙げられる。外国人留学生と日本人学生の双方が自文化グループの中に留まろうと

* 兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻教育コミュニケーションコース 准教授

令和6年4月25日受理

** 兵庫教育大学大学院学校教育研究科（修士課程）人間発達教育専攻教育コミュニケーションコース

する傾向をもつのである (Hennings & Tanabe, 2022)。他にも、表現や態度が直接的か間接的かという基本的なコミュニケーションスタイルの違い (上原, 2009) や、日本人学生が有する留学生に対する特定の行動期待の問題 (田中ら, 2011)、日本人学生の欧米文化への先入観と、それによって阻害されるアジア地域出身留学生との異文化コミュニケーションの問題 (金本, 2013)、また日本人学生コミュニティに特有の「上下関係」が留学生を疎外する危険性 (出口・八島, 2008) など、種々の問題が指摘されている。

異文化コミュニケーションが促進されない要因は多岐にわたっている。もちろん、コミュニケーションの当事者である留学生と日本人学生ら、彼ら自身の「意識」という次元の問題もある。だが、コミュニケーションを二者間の事柄としてのみ取り扱ってはいは、有効な視点を見落としてしまう可能性がある。異文化コミュニケーションが活性化する要因には、二者間を取りまく環境や関係を調整することが大きな役割を果たしていると考えられるからである。或いは、それは〈システム〉と〈第三者〉という視角の重要性である。

本研究は、外国人留学生と日本人学生との異文化コミュニケーションを促進する要因や取り組みについて、後述する京都「国際学生の家」¹をケースに、インタビュー調査を通して探究する。

2. 先行研究の検討

本稿が検討の対象とするのは、日本の大学・大学院における外国人留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションである。それを主題とした先行研究は少なくない。それらのうち、寮に注目し特にそのシステム——「ルール」や、組織化された全体としての「環境」とも言い換えられるもので、物的・人的・制度的側面を有する——に着目した研究として、山川 (2013)、正宗 (2015)、吉田 (2015) などが挙げられる。

寮に住む留学生と日本人学生の友人関係に着目した山川は、環境や関係を調整可能な「システム」と捉え、その重要性を事例を通じて検討した。日本人学生と外国人留学生の異文化コミュニケーションは自ずと成立するものではなく、それゆえにシステムの調整が有効である。「【寮のシステムの環境】は、すでに大学側で決められているもの」と述べる山川は、留学生を受け入れる大学は、「留学生と日本人学生が接触できる混合寮」を提供すべきではないかと提言する。

一方、寮の教育的な機能についても注目した正宗は、留学生に対する寮の教育的可能性について考察し、それを (1) 異文化適応段階を意識した日本人学生による生活的・文化的側面でのサポート及び教育的機能、(2) 日本語に接する平等な機会の提供と言語面でのサポート

及び教育的機能、(3) 寮生活での自己の目標の設置や到達評価の確認を行うシステム、(4) 日本語上級者には学術的なテーマなどについて議論し合う機会の提供、の4点に整理した。吉田は、日本人学生と留学生の混合寮 (混住寮) について検討し、寮を単なる「生活の場」としてだけではなく「学びの場」へ転換することを提唱した。そのためには育成すべき人材像や教育目標を明確化する「教育的介入や体系化したシステム」が不可欠だと主張した。

居住者に対する教育的機能を重視する「混合寮」は、2008年に発表された「留学生30万人計画」(文科省)の実現が目指される過程で、国家的に推進していくことが謳われた設備である (文部科学省, 2014年7月31日)。日本人学生と留学生とが「共に居住し、相互に異なる文化に直に触れながら生活するとともに、共同の学修プログラム等を実施する」宿舎としての混合寮は、当初は「知日派、親日派」留学生を増やすことが目的と言われたが、今日では「日本人学生の国際性」や「グローバル人材」の育成の教育的機能も重視され、各地の大学にその設置が拡がっている (文部科学省, 2015年11月30日)。高橋 (2016) の言葉を借りれば、「教育寮としての混合寮」の拡大である。

以上の例において、「友人関係」の構築にしても、留学生の言語・文化面のサポートにしても、日本人の「国際性」の育成にしても、いずれの促進も大学・教職員による介入が求められている。それは、「教育的介入」である。大学の寮には広い意味での教育的機能が期待されている。そして、その教育的機能を促進するためには、人的・物的・制度的にも関わる調整可能なシステムや教育的介入が不可欠である。この際、その介入が直接的であれ間接的であれ、大学と学生との関係は、教育的介入の主体である「教育者」と、客体である「被教育者」の「教育関係」(第6節で後述)が成立している、ということができる。

そうした「教育関係」または「教育的介入」について考察する上で非常に示唆的な研究が、岡山大学の「桑の木学生寄宿舎」の実践事例報告である (宇塚・岡・藤本, 2018, 2019)。岡山大学「桑の木学生寄宿舎」では、大学側からの教育的介入によってシステム面を調整することで、外国人留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションが促進された。具体的には、レジデントアシスタント (RA) と呼ばれる日本人学生を留学生寮に複数配置し、管理運営上の問題改善と、加えて双方の異文化理解促進を図る取り組みに拠るもので、従来の留学生支援にとどまらない教育的要素を取り入れた新しい国際寮のあり方を示唆するものである。だが、問題もあった。RAと留学生の関係が支援の提供者と受益者のそれになってしまったために、負担面での物理的な差異から

両者の信頼関係が失われる事態が発生したことである。宇塚らは、学生だけで自治を行いながら異文化交流することの困難さと、それに対する日本人学生と外国人留学生の二者間の間を取りもつ教職員による、よりきめ細やかな教育的介入の必要性を示唆している。

しかし、いうまでもなく大学側からの積極的な教育的介入のみが、問題解決の唯一の方法ではあるまい。本稿は「教育関係」の観点から、この点について改めて考察したい。例えば桑の木学生寄宿舎では、RA 導入に至る議論の過程で、別に「夫婦住み込みの管理人の配置」が提案されていた。高橋が「教育寮としての混合寮」のデザインについて、「家族のような関係」にも触れていたように、異文化コミュニケーションを促進する道筋は、教育的介入を包括するような介入のあり方やその人間関係を視野に含めた検討が有効であると考ええる。そこで、本研究が今回注目するのは、京都「国際学生の家」である。

3. 京都「国際学生の家」

京都「国際学生の家」とは、1965年に京都市左京区に開寮した、外国人留学生と日本人学生が共に居住する公益財団法人（2013年まで財団法人）の混合寮である。第1次・第2次世界大戦を経験した創設者のスイス人神学者・ヴェルナー・コーラー氏（1920-1984）は、宣教或いは研究で訪れた京都に、「共同の生」の理念を実現しようと考えた²。戦争を回避するには、国家、イデオロギー、宗教、慣習、文化等の異なるバックグラウンドを持つ若者達が、共同生活を通じて国際的な相互理解をして共生をする精神が大切だとして、その「訓練」の場として京都「国際学生の家」（Haud der Begegnung (HdB), Kyoto International Student House）を設立した。

京都「国際学生の家」の現理事長である内海（2015）は、設立の理念である「共同の生」について次のように説明している。「外国人学生と日本人学生とに提供する学寮という生活の場は、表層的な共存ではなく、異なる国家あるいは民族の間に厳然として存在する人種、宗教、慣習、文化さらにはイデオロギーといったものの相違を、寮生相互に対決（confront）させ、これらの相違を互いに認め合った上で、一個の人格としての「出会い（Begegnung）」を体験させる道場である。この「出会い」を通じて、相互の相違を認識し、相互に承認し合うという、きわめて厳しい努力と体験を通じて得られる寛容（Tolerance）が、人類普遍の願望である人類共存の道を達成する有力な手段である」。実際に、後述するインタビューに応じてもらった学生たちは、出身、宗教、性別、研究・専門等、実に様々であった。

京都「国際学生の家」は、スイスを含むドイツ語圏に普及している WG（Wohngemeinschaft、住居共同体）の

ようなシェアハウスにも似るが、それとは異なり、この学寮を特徴づけるのが「ハウス・ペアレンツ」の存在である。「共同の生」を実現させる仕組みの要は「家（Haus）」であり、京都「国際学生の家」の親に相当するのが「ハウス・ペアレンツ」である。ハウス・ペアレンツは、学生たちと共に居住する学寮管理者である。学生たちが共同生活を営む上で、生活で困ったことや悩みがあれば、相談に乗る役割を担う。しかし、それは居住学生の面倒をみる一般的な寮母・寮父ではない、という。「ハウス・ペアレンツ」という家族と共に、家庭的雰囲気と秩序の下に進められる共同生活を通じて、外国人留学生と日本人学生が国際的理解と友愛を培い深める「人間理解・人間形成の道場」——そのような意味から「国際学生の家」という名称が選ばれたことから分かるように、ハウス・ペアレンツは京都「国際学生の家」の〈システム〉において不可欠の存在である。調査時のハウス・ペアレンツは、2022年4月から赴任した一組の日本人夫婦（ハウス・ファザーとハウス・マザー）であった。京都「国際学生の家」から毎年発行されている年報（Year Book）には、その役割が創立当初から伝統的に受けつがれていることが語られている（内海、2023、7頁）³。

本研究では、学生間の異文化コミュニケーションの在り方について考察するうえで、京都「国際学生の家」におけるハウス・ペアレンツという存在から興味深い示唆が得られるのではないかと考える。ハウス・ペアレンツは（大学の）教職員ではない。結論を先取りして言うならば、居住する外国人留学生及び日本人学生たちとの間には、後述するような「教育関係」が築かれており、彼らは京都「国際学生の家」の〈システム〉として／とともに学生たちのコミュニケーションを促進する教育的介入の担い手となる〈第三者〉なのである。では、如何にしてそれは可能であるのか。ハウス・ペアレンツは学寮にどのように存在しており、どのように学生たちと関わっているのだろうか。それらについて調査することで、本研究の主題についての有益な示唆が得られると考える。

そこで、実際に京都「国際学生の家」を訪問し、留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションの様子を観察、及びハウス・ペアレンツについてインタビュー調査を行うことを計画した。

なお、現在は公式名称として「京都国際学生の家」と表記されるが、実際は「京都「国際学生の家」」というように、「国際学生の家」に「」が付されている。そこには、設立理念である「共同の生」の試みが全国に普及して欲しいという創設者たちの願いが込められている。即ち、当学寮は京都の「国際学生の家」であり、全国各地にも当地の「国際学生の家」が設立されていて欲しい、との願いだ。但し、公益財団法人として登記

する際に「 」を付することができなかった事情のために、現行の表記となっているという。本稿では、本来の名称通り「京都「国際学生の家」」と表記する。

4. 方法

●調査実施までの流れ

インタビュー実施の一ヶ月前に京都「国際学生の家」宛てに、本研究の趣旨と目的について、そしてハウス・ペアレンツへのインタビュー調査を行いたい旨のメールを送信した。先方からは、すぐにインタビュー快諾の返信があった。やりとりの過程で更に、レジデントへのインタビュー、施設見学、主要な行事である「コモンミール」への参加が可能との提案を受け、その厚意にあずかることとした。この時点で、本研究は、ハウス・ペアレンツのみならずレジデントへのインタビューを通して、京都「国際学生の家」におけるハウス・ペアレンツの存在について、より多角的な視点から検討する方向性をとることとした。また、施設見学やコモンミール参加から得られた内容も、積極的に考察に活用することとした。

その後、インタビューで予定している質問項目（日本語及び英語で表記）及びインタビュー調査協力への同意書を作成し、ハウス・ペアレンツとレジデントに対して事前に送付した。但し、実際には回答のための十分な日数を確保することができなかったこと、また当日は多くの入居学生がインタビューに協力してくれたことから、研究協力への同意と主要な質問についてその場で書面及び口頭で都度確認しながら進めることとなった。本調査結果を研究論文として公開することについても同意を得、プライバシーへの十分な配慮を条件に、許可を受けた上で調査を実施した。

質問項目（日本語）を以下に抜粋する。

●ハウス・ペアレンツについて

- ・ハウス・ペアレンツにとって、学生はどのような存在であるのか。
- ・学生間のトラブルに対して、どのように介入するのか。
- ・ハウス・ペアレンツの役割は、性差によって分かれているのか。
- ・ハウス・ペアレンツがいることのよさと課題は何か。

●居住学生について

- ・学生にとって、ハウス・ペアレンツはどのような存在であるのか。
- ・他者に対して対等な地位関係にたつことはできるのか。
- ・他者との違いを乗り越えるために必要なことは何か。
- ・同じ言語を話す人々がグループを形成することがあるのか。

●施設について

- ・運営上困難なことがあるのか。

●イベント（行事）について

- ・コモンミールの機会だからこそ打ち解けられることはあるのか。
- ・宗教上の理由によって、参加もしくは開催できないイベントはあるのか。

●調査実施日

2023年12月8日（金）、16時～21時

●調査場所

京都「国際学生の家」（京都府京都市左京区聖護院東町10番地）施設内。

●調査の概要⁴

①グループインタビュー

調査者（本稿執筆）の5名がインタビュアーとして、16時から18時まで1階応接室にてハウス・ペアレンツ（ハウス・ファザーとハウス・マザーの2名）へのインタビューを実施した。入居している日本人学生1名もメイン・インタビュイーとして同席するグループインタビューの形式をとり、先に示したような質問内容に基づいた半構造化インタビューを行った。インタビューには、他に2名の日本人学生及び5名の外国人留学生も、それぞれの可能な時間に適宜入れ替わりながら参加した。

質問はインタビュアーの5名全員で行い、許可を得てICレコーダー及びビデオカメラにてインタビューの様子を記録した（ビデオカメラは、主にハウス・ペアレンツを収める位置に設置した）。

②施設見学

18時から19時まで、ハウス・ファザーの案内のもと施設全体の見学を行った。許可を得て、写真撮影を行った。

③行事への参加

京都「国際学生の家」の行事のひとつであるコモンミール（第6節参照）に参加した。コモンミールでは担当の居住者たちが料理を行い、原則・全居住者とハウス・ペアレンツが数人ずつに分かれたテーブルにつく。調査者も分かれてテーブルにつき、食事を取りながらそれぞれ留学生および日本人学生と交流・調査を行った。②同様、許可を得て写真撮影を行った。

5. 結果

(1) インタビュー

上記①のグループでの半構造化インタビューについては逐語録を作成した。また②、③においても、本研究の目的に沿った非構造化インタビューが展開されたと言いうる場面が見られたため、それらについてもメモ等をもとに書き起こし、同等のインタビュー内容として扱

うこととした。以上の内容について、筆者らの問いに沿う形で整理したものを以下に示す。なお、英語でのやりとりは翻訳して記述する。発言者は以下のように表記する。

- ・ HF = house father, ハウス・ファザー
- ・ HM = house mother, ハウス・マザー
- ・ R(J) = resident (Japanese), 日本人学生
- ・ R(I) = resident (international), 外国人留学生
- ・ I = interviewer, 調査者

●学生にとってのハウス・ペアレンツという存在

居住する学生にとって、ハウス・ペアレンツ（HP）はいかなる存在であろうか。寮の管理運営上の必要から指導的関わりを行う「教員」のような存在であろうか。レジデントへのインタビューでは、複数から「本当の親のように感じている」という趣旨の発言がなされた。

- I : 学生にとって HP はどういう存在ですか？
- R(J)1 : 学生が今 30 人ぐらいいるけど、それぞれのことをすごく覚えてくださっている。
- R(J)2 : 事務的なことだけでなく、心理的な部分でも欠かせない存在で、みんなの面倒を見て下さっているのかなと思っています。
- R(I)1 : 私にとって、それは学生のケアをする人たちです。すべてが本当の親のようです。いいことも悪いことも、HP に伝えることができます。
- I : HP を先生 (teacher) のように感じることはありますか？
- R(J)1, 3/R(I)2 : (声を揃えて) ないですねえ。
- R(I)2 : 私は留学生なので、本当にペアレンツと思っています。いろいろとお世話になっています。
- R(J)3 : 面倒見のいいお父さん、お母さん。本当に 30 人兄弟の [お父さんやお母さん]。
- R(J)1 : 学生同士の関係性とかも含めて、いつも見えてもらっているという感じがあります。
- R(J)2 : 小規模とは言っても 30 人もいるので、みんながみんな全員とめっちゃくちゃ仲がいいってわけではない。でも、HP が全員とつながっているの、[学生たちの] まとまりがある感じがします。

●ハウス・ペアレンツにとってのハウス・ペアレンツという存在

ハウス・ペアレンツ自身に「ハウス・ペアレンツ」について尋ねた。仕事の内容や学生との関わりについてやりとりをする中で、ハウス・ペアレンツからもまた学生に対して積極的な「指導」は行わないとの語りが聞かれた。

HM : 去年 HP をやってほしいって言われた時に、2 人が健康でいられるならばできると [回答しました]。学生たちとずっといますし、そういう若い人たちともコミュニケーションをとろうと思ったたらエネルギーがいるのですよ。本当にしんどいですよ (笑)。

I : HP が 2 人の方がよい理由は、体力面以外にありますか？

HM : ここは HF に言ってもらった方がいいということはありません。例えばメールが来たとしても、私 (HM) は答えないで、あなた (HF) が答えてよって。

I : ハウス・ペアレンツは、HF と HM とで明確に役割が分かれていますでしょうか？

HM : 明確な仕事の線引きは分からないですけど、やっぱり違いはありますね。

HF : 学生たちの栄養面で偏っている時は、HM の方がちょっと手を添えてやるとかして、みんながバランスよく食事ができるようにしています。

I : まさに寮母のような役割ですか？

HM : HM は寮母とは訳せないですね。HM は HM です。

I : HF の役割はいかがでしょうか？

HF : 自分が忙しいからと言って、[行事の] 企画や準備段階から、なかなか参加しない学生がいます。そうした所で他の学生たちから不満がでます。そういう子にはやっぱり、きっちりと意識を変えてもらわないといけないということで、ちょっとアドバイスというか、[HF が] 苦言を呈することはありますね。

I : HF は積極的に指導をする役回りなのですか？

HF : そうとも限りません。ほらここ (キッチンの水回り。洗っていない食器が積んである。), 汚い



(写真 1) ハウス・ペアレンツの山本慶一・夏子夫妻。2024 年 3 月末で 2 年間の任期を終えられた。(提供写真)

でしょ。きれいにすればいいのと思うのですが、レジデントが問題だと思うまで黙っていますね。問題だと取り上げて、みんなで話し合う時に、あれば意見を言うようにしています。

I : 学生の方たちにとっても、HF と HM は異なった存在に映っているのでしょうか？

R(J)2 : お父さん、お母さん、どちらもなんかいい意味でキャラが違います。そういう意味で、お父さんに相談するか、お母さんに相談するか選びますね。

●ハウス・ペアレンツにとっての学生の存在

「寮母」ではないと回答するハウス・ペアレンツにとっての学生の存在は如何なるものか。それは、二面的な見方で捉えられている。一つは、同じ家で生活する家族であり「孫」のような存在である。もう一つは、世界へ広がる貴重な「人材」という存在である。

I : 学生たちは、HP を親のような存在だと話されていましたが、HP にとっての学生はどのような存在なのでしょう？

HF : 本当に一つの屋根に暮らしている。うちはファミリーっていう感覚の中のハウスです。なんかすごく気楽でしょ。

I : それは家族的な関係なのでしょう？

HF : ファミリーだな。もうほんまにファミリー。

HM : 学生は孫よりもちょっと大きい。孫のちょっと上の学生たちと何かしていると、孫とのコミュニケーションもよくとれるようになります。

I : 「祖父母」とは異なる視点から学生を見ることはありますか？

HF : 京都「国際学生の家」に来る学生さんたちは、それなりにここの理念なり目的なりを理解した上で面接を受けて入ってきています。ここにいる2年間で「共生の」「実験」をしてね、経験をして、また外に出て行く。そういう意味で言えば、将来ここで学んだこと、例えば色々な人と考え方が違うこと、人種が違うといったこと。そういったことを経験している人たちが世界に広がって行くという意味で言えば、将来を背負ってゆく学生たちでもあります。貴重な人材というようなことです。そのような視点から見るところもありますね。

●日本人学生と外国人留学生が用いる言語

言語はいつでも、異文化コミュニケーションのポイントでありネックとなる。寮内の公用語が日本語と英語の二言語である京都「国際学生の家」では、どのような実

態があるのだろう。インタビューでは、日本人学生と外国人留学生はお互いの言語や文化を学びたい意識をもっている、との言葉が聞かれた。

I : 京都「国際学生の家」と大学では、異文化コミュニケーションをする際に何か違いはありますか？

R(J)1 : 私は大学の留学生委員会で働いていて、公用語が英語なんです。日本人と留学生が半々ぐらいいて、全員英語で話すのですが、やはり留学生の方が口は上手いし、どちらかというと留学生主導で日本人は頑張っついていく形です。一方、日本に来て留学生同士でつるんで観光して〔母国へ〕帰りたい人もいる中で、ここに住んでいる人たちは、日本語を頑張って勉強してコミュニケーションを取ろうという気持ちがあります。日本人も同じ気持ちで英語を話します。それで対等な関係になっている気がします。

I : 母国語が通じないことが、孤独や不安といった問題につながることはありますか？

R(I)3 : 私たちは日本にいますので、確かに自分たちの言語で話すことはできません。ですが、それは大きな問題ではありません。私たちは別の国(日本)に住んでいるのですから。

R(I)4 : [私の母語である] スペイン語を話せるレジデントは他に1人だけで、同じ言語で誰かと話したいと思うことはあります。でも、私の友達の多くは英語か日本語を話す人たちです。日本人と話そうと思えば誰でも話せると思いますし、たぶん皆そうしていると思いますよ。

I : 互いの言語交流をする (language exchange) ことについて、どのように感じていますか？

R(I)5 : とても素晴らしいことだと思います。他の国の人々がどのような価値観をもって生きているのかを学ぶこともできます。勉強するためにここへやってきた他の人々も、多くの共通点を持っているのではないのでしょうか。多くの人が研究に情熱を燃やしているため、どんな研究内容であっても、アカデミックな話をするのは好きですね。

●学生間の上下関係

「対等な地位関係」(前出、質問項目)の構築は、その当否はさておき、難事である。先行研究では、日本人特有の「上下関係」が留学生を疎外し、寮における共同生活を阻害する危険性が指摘されていた。しかし、京都「国際学生の家」ではそのような関係はあまり意識され

ないようだ。

I : 言語の違いで上下関係が問題となることはありますか？

R(J)1: 僕の感覚ですが、日本人と話しているときは、自分より先に「京都「国際学生の家」に」居る人や、年上の人には敬語を喋ります。こちらは後輩として接するので、多少の上下関係はあると思います。でも、英語で話すと敬語が使えません。外国人はそもそも年齢もよくわからないので、外国人と話すときは、上下関係を感じることはありません。ですので、日本人と話す時も、一旦英語で話して、そこから日本語に戻したりすると、その後の会話での敬語が分からなくなります。それで、ため口で話すこともあります。それでも、許容してくれる人が僕の周りには多いので、〔学生間の関係は〕緩やかな関係かと思っています。

●行事（コモンミール）

クリスマスパーティー、スポーツデイ、ワークショップ、OM（元寮生）の講演会等、様々な行事が運営されている中で、各国（居住者の出身地）の料理を全員で囲む「コモンミール」が行事の中心的存在に位置づけられている。それはどのような意味においてであろうか。

I : 京都「国際学生の家」にとって、コモンミールはどのような位置づけがされているのですか？

R(J)1: 〔共同・協働、或いはコミュニケーションを活性化する点で〕とても機能としていると思います。まず、一堂にみんなが会することが定期的にあるっていうのはいい事かなと思っています。

R(J)2: 以前住んでいた寮にはあまりイベントがなく、つまらなかったです。だから誰と暮らしているか分からないので、そういった中で一回みんなが集まってご飯を食べる機会があるっていうのは、いい事かなと思っています。

HF : 行事で役割分担をする時に、自分の急用で参加ができないときに、周りの学生から不平不満が出ることもあります。準備段階あるいは企画の段階から関わっていればいいのですが、やはり、おざなりになるケースがあります。そのため、本当の精神で「違いを認めあう」〔ことが重要です〕。つまり、創設者のコーラー先生の言う“agree to disagree”という形でね、違いを認めあう。例えばアジア系日本人とヨーロッパ人では、考え方が違います。そここのところは認め合って、カバーし合うという。その代わりに、何か別のと

ころでは、積極的に参加してもらうような形をとってもらいます。

I : お互いをカバーするという点において、コミュニケーションが重要になると考えますか？

HF : やっぱ常に普段のコミュニケーションが大事だと思います。それを除くと寛容さです。相手のことは理解できないものですね。その辺が一番大事なことです。普段の生活の中で。

(2) 施設見学

京都「国際学生の家」に暮らすのは、レジデントの学生と2名のハウス・ペアレンツであるハウス・ファザーとハウス・マザー。レジデントは約30人が居住でき、男女別にフロアが分かれている（居住者の方針としては、1年以上在籍可能で、日本人以外は1国3名まで、日本人は定員の1/3を上限とし、男女各17名までと決められている）。ハウス・ペアレンツは学生たちと同じ棟で生活しているため、常に顔を合わせる環境である。コロナ禍により入居者数は減少したが、調査時には30名が居住していた⁵。留学生の出身地は中国、タイ、アメリカ／ドミニカ（二重国籍）、ドイツ、ウガンダ、マダガスカル等多岐に渡っていた。京都大学の近くに所在しており、京都大学の学生も多く居住するが、別の大学からのレジデントもいた。

彼らの生活する施設は、レジデントとハウス・ペアレンツ、そして短期滞在の研究者（スカラー）のための居室、共用のシャワー、トイレ、ランドリールーム（見学时も多く洗濯物が干してあった）、応接室、食堂・ホール、事務室などを備えている。元寮生であるオールド・メンバー（OM）や来客向けの小さい宿泊スペースもある。家に面した大きな庭には、立派な灯籠や四季折々に花が芽吹くであろう木々が植えられていた（写真2）。資金不足のため、かつて庭や運動スペースの一部であったところが、現在は駐車場に改築されているという。

食堂を兼ねたホールは、ビリヤードやゲーム、ダンスパーティー、楽器演奏、空手の披露などが行われるコ



（写真2）京都「国際学生の家」の庭

コミュニケーション空間である。そこで用いられるギターやボードゲーム等の数多くの道具は、京都「国際学生の家」を卒業したOMが残したものであるとのことだった。グランドピアノは、特にハウス・マザー（調査時現在）の両親が初代ハウス・ペアレンツを務めていた時に、是非にと、設置したものだという（写真3）。「食べることと音楽と」をコミュニケーションにおいて重視したためのものであり、お披露目の際には声楽家を呼んでコンサートも開いたという歴史的なピアノである。現在も学生が好きなときに演奏を楽しんでいるという。



（写真3）ホールに設置されたグランドピアノ（提供写真）

（3）コモンミール

京都「国際学生の家」には、様々な行事が設定されている。その中でも、コモンミールは重要な位置づけであり、インタビューに参加した学生たちからも肯定的に捉えられていた。

コモンミールとは、おおよそ月2回、金曜日の晩に行われる、共食の場のことを指す。レジデントはすべてのコモンミールに参加することが求められる。また、HPやOM、近隣住民の方々も参加する。コモンミールの料理はレジデントの中から選ばれたクック及びヘルパーがハウス・ペアレンツとスタッフの協力の下に作る。レジデントは各学期に1回はクックおよびヘルパーをつ



（写真4）コモンミールで提供されていた料理

とめることが求められる。他のレジデントはコモンミールの手伝いをする。

調査当日は、ドイツからの訪問団もあり、ビュッフェ形式のテーブルにはドイツ料理のシュベッツレ（Spätzle）が並んだ。写真4には他にペンネ・アラビアータやサラダ、お好み焼き、炊き込みご飯が写っている。実は、ここには写っていないが、これともう一對見目は殆ど同じメニューが並ぶテーブルがあった。それは、共食のために揃えられた、豚肉や油、グルテンフリーやベジタリアン、ヴィーガンなど、宗教的、信条的、また体質的な配慮をゆき渡らせたものであった。

外国人留学生と日本人学生のレジデントらが入り混じって5,6人のテーブルにつき、我々もそこに参加した。英語及び日本語による参加者の紹介や料理の紹介が行われたあと、各テーブルで食事をとったり、料理を取ったりする際にコミュニケーションを交わした。あるテーブルでは、帰国を控えた留学生と就職を控えた日本人学生との間で、別れを惜しむやり取りが行われていた。彼女らはその席で久しぶりの再会を果たしたようで、互いの近況を報告しあっていた。コモンミールが、再会と別れのコミュニケーションの場としても機能していることが感じられた。

他にも、コモンミール会場には居住者だけでなく、事務方、仕事の出張帰りに立ち寄ったOMやレジデントの友人、我々のような外部からの研究者を快く迎え入れる体制が整っていた。また、食事の最中には互いにコミュニケーションを取り合うものの、イヤホンを付けて何かを聴いたり、携帯で電話をしたりしている者がいても気に留めることはない。当人も話しかけられればそれに対して笑顔で返答する様子を観察することができた。コミュニケーションにおける柔軟性をもち、他の事をしつつも集団の一員であるという意識がそれぞれのメンバーに感じられた。

また、コモンミールのなかでの何気ない会話に、宗教的事柄に対するレジデントの配慮の一端に触れることができた。調査者の一人は、日本のクリスマスや正月の文化についてあるレジデントから質問を受けた⁶。その際、いきなり質問をするのではなく、前置きとして、宗教的な観点で答えたくないなどであれば言ってほしいということを2回ほど念押しされたのである。一般的に日本人が日常的に意識することが少ないといわれる宗教的な配慮ではあるが、京都「国際学生の家」では各人が互いの宗教的背景に対する配慮を自然に行っている実態を経験することができた。

6. 考察

今回のフィールドワーク（インタビュー及び実態の観察）から、京都「国際学生の家」の外国人留学生と

日本人学生たちレジデントとハウス・ペアレンツを含むハウスメンバーは、自分たちの意見や態度、習慣や文化について、コミュニケーションを活発に取っていることが分かった。そのような活発なコミュニケーションを可能にしている要因は何であろうか。問題部分（第1節）で述べた通り、本研究は、異文化コミュニケーションが活性化する要因として、コミュニケーションの当事者である二者間を取り巻く環境や関係を調整することが、大きな役割を果たしていると考えていた。では、それらに相当する事柄、すなわち〈第三者〉と〈システム〉は、京都「国際学生の家」における活発なコミュニケーションの要因となりえていたのだろうか。

結果（第5節）において示したように、それは是と言い得ると考えられる。ならば、如何にしてそれらがコミュニケーションの活発化を可能にする要因となりえているのか。以下では、(1)〈第三者〉としての「ハウス・ペアレンツ」の存在と、(2)京都「国際学生の家」において機能している〈システム〉、という二点を持つ意味について考察を試みる。

(1)〈第三者〉としてのハウス・ペアレンツ 家族的関係

最初に、ハウス・ペアレンツについて考察する。学生にとってのハウス・ペアレンツは、文字通り京都「国際学生の家」における「親」のような存在であることが分かった。ハウス・ペアレンツもまた同様に、学生を同じ家で生活する「ファミリー」であり特に「孫」として捉えていた。まずはハウス・ペアレンツと学生の両者のあいだには家族的関係、あるいは祖父母—孫関係が成立しているといえる。

インタビュー中、ハウス・ペアレンツとレジデントたちが日々のことを互いに「ありがとう」と感謝し合う場面があった。そこには双方への敬意が感じられた。祖父母—孫関係については、特に孫の年齢・成長によって性質が異なることが先行研究にも指摘されているが（杉井、2006。野中・奥野、2021）、所謂成人年齢に達したレジデントたちとハウス・ペアレンツは「個としての尊敬」を強く有した家族的関係を築いているのである⁷。

家族的な関係の構築は、ハウス・ペアレンツと学生だけではなく、学生間にもみられた。上下関係などについて質問したインタビューの中で発せられた、「先輩というよりはお兄ちゃんぐらいの感じが僕はしていますかね」という日本人レジデントの発言からそれを窺い知ることができる。外国人留学生と日本人学生の関係についての先行研究では友人関係に着目したものが多いが、京都「国際学生の家」では、居住する学生同士の家族的な関係の雰囲気醸成されていた。

そのような背景には、ハウス・ペアレンツの存在が大

きく寄与していると考えられる。「〔学生たち〕それぞれのことをすごく覚えてくださっている」というレジデントの言葉通り、インタビューの際、ハウス・ペアレンツは協力してくれた学生たちの名前や国籍のみならず、専攻や研究内容までもを朗らかに紹介してくれた。例えば、ハウス・マザー（調査時）は、英語があまり堪能ではないという。それでも、通訳となる学生やアプリを介して、留学生たちは相談にのってもらおうとする。共通する言語はコミュニケーションを促進する大きな要因であることは間違いないが、一方で、自分自身を気にかけてくれている人に話を聞いてもらいたいという側面もコミュニケーションを促進する要因として働いている。以上もまた、家族的関係の賜物といえるかもしれない。

教育関係と教育的介入

一方、そこにはハウス・ペアレンツと学生たちが築いている、別種の関係も見えてくる。インタビューでは、当然レジデント同士が全員「仲がいいというわけではない」環境の中で、ハウス・ペアレンツが「まとまり」をもたらししていると語った学生がいた。ハウス・ペアレンツは、学生たちの関係を結びつけてくれる中心的な存在として学生たちに受け入れられている。それは、学生間——この際は「外国人留学生」と「日本人学生」というカテゴリーを超えた他者同士としての「学生」たちのあいだでもあろう——のコミュニケーションを取り結ぶ、〈第三者〉としてのハウス・ペアレンツの存在である。

ハウス・ペアレンツにとっての学生の存在は、「家族」であると同時に、世界へ羽ばたく「貴重な人材」でもあるという。京都「国際学生の家」の基本理念は「Life Together（共生）」である⁸。それは冒険（adventure）であり実験（experiment）であり、京都の「Haus der Begegnung（出会いの家）」では、小さな次元で新しい社会の形を実践することが希求されている。ハウス・ペアレンツは、学生たちがこの場所で「訓練」し培った「共生」のための経験を世界に広げていってほしい、戦争の無い Life Together の世界の実現に重要な役を果たして欲しい、という願いと期待がある。それゆえに、ハウス・ペアレンツは上記のような家族的関係とは少し様相の異なる立ち位置を、学生たちに対してとることになる。

このもう一つの関係を考察するために、「教育関係」の視点を採用する。教育関係とは、通常教師（教え手、教育者）—生徒（学び手、被教育者）の二者関係のモデルを想定して語られ、20世紀初頭の教育学者ヘルマン・ノール（Herman Nohl, 1879-1960）が定式化したような、一方向的な「志向性」によって特徴付けられる。だがここでは、そのような一般的な教育関係を批判し、「相手の人間の形成なり発達と呼ばれる事態にかかわる」「教

育的行為」の、より広い関係に着目した宮野安治（1996）や、二者関係ではなく「三者関係の複合体としての共同体」として教育の関係を捉えようとした宮澤康人（2011）の議論に近い、教育関係の視角から考察する。

まず、ハウス・ペアレンツは「先生（teacher）ではない」。学生たちがそう回答する意味を解釈してみると、第一にそれは、伝統的教師観から想起されるような一方的「指導」を行う者、ではないという主旨であろう。実際、Life Together の「実験」場において、ハウス・ペアレンツは学生と対等な関係で話し合いを行うことを心がけている。例えば、インタビューでもあった通り、キッチンの水回りが汚れていることに、ハウス・ペアレンツが気づいたとしても、汚れていることに問題があると学生が認識するまでは、直接的に指導をすることはない。もちろん、学生たちから相談があれば、寮の管理者として注意は与える。だが、それも学生間のコミュニケーションを待ってのこととなる。ハウス・ペアレンツが先回りに「指導」をしてしまえば、学生間でのコミュニケーションを図る機会を奪ってしまうことになるからである。

大学寮内で発生した学生間トラブルの対応として、先行研究では、留学生相談室担当教員による指導や、さらには定期的で且つ学生に寄り添ったきめ細かい指導が必要であることが論じられていた（宇塚・岡・藤本，2019，174 頁）。そうした方法の有効性については論を俟たないだろう。だが、そのような教員による教育的介入と、京都「国際学生の家」のハウス・ペアレンツによる教育的介入とのあいだには、興味深い差異があるように思われる。京都「国際学生の家」では、学生とハウス・ペアレンツが問題を共有したり解決策を考えたりする際に、むしろ共生のためのコミュニケーションが活発化する。さらに、ハウス・ペアレンツが「指導者」の位置に立たず、学生と対等な関係を志していることによって、誰かの一存で問題解決が図られるような発言者の偏りがうまれにくくなると考えられる。

ハウス・ペアレンツは、学生に対して家族的な関係とある種の教育関係のような、多面的な関係を結んでいる。教育学者の宮澤（2011）は、人が育つ教育的関係の結び方として、垂直的なタテ関係と水平的なヨコ関係に加える「ナナメの関係」の重要性を指摘した。この際のハウス・ペアレンツと学生たちの関係には、そのような「ナナメの関係」が成立している、ということもできるかも知れない⁹。そして、それを「国際学生の家」における外国人留学生と日本人学生の異文化コミュニケーション、という観点から捉えた場合、コミュニケーション当事者たる二者に対する〈第三者〉としてのハウス・ペアレンツの姿が浮き彫りになるのである。ハウス・ペアレンツが学生たちのコミュニケーションを促進する大きな要因となっていることが分かる。

2人の「教育者」の妙

教育関係の視点からもう一点だけ検討する。ハウス・ペアレンツ自身が考えるハウス・ペアレンツの存在について、1人ではなく2人であることが重要であることが述べられていた。調査時のハウス・ペアレンツは、一組の夫婦が務めていた。彼らが2人であることをよしとするわけは、第一には体力面からだが、もう一つは役割の分担が考えられる。計画的に分担しているのではないが、場面に応じてマザーとファザーをそれぞれの役割を分けて担い、また、学生側も、相談事の内容に応じてハウス・マザーかハウス・ファザーかを意識して選んで話をしているという。従来「性役割」として性別に強固に結びつけて論じられてきた立場に与するものではないが、例えば「母性」や「父性」というカテゴリーで論じられてきたような種々の役割を、2人が分担して果たすことができているのである。

このことは、「教育関係」のオリジナルともいえる教師—生徒関係に対する示唆に富んでいるように思われる。今日も一般的な、学校の伝統的な教室における教師（教員、教諭）は「孤独」である¹⁰。19世紀の初めにドイツの教育学者ヘルバルト（Friedrich Herbart, 1776-1841）は、「教育者（Erzieher; teacher）は、少年にとって将来の大人を代表するものである」と述べたが（Herbart, 1806, S.83; 1892, p.110）、多数の生徒の前で教壇の上に一人立つ近代学校の教師は、実際には子供たちの職業モデルや社会的ロールモデルには殆どなりえず（クラスの子供たちが将来皆「学校の先生」になるのではない）、それゆえに観念的で説得力があるとはいえない「将来の大人」の「代表」であることを強えられる。と同時に「親代わり（in loco parentis）」の任も求められ、時に相矛盾する役割¹¹をこなさねばならない。1人で当たることは決して不可能ではないが、京都「国際学生の家」の本ケースは、教師たちにそのような教育関係を省察する機会を与えてくれるのではないだろうか。

(2) 異文化コミュニケーションを促進する〈システム〉

入寮時の面接——“*Ask not what your country can do for you, ask what you can do for your country.*”
(John F. Kennedy)

次に、京都「国際学生の家」の様々なシステムについて考察を進める。ここで述べる「システム」とは、人間関係を円滑にするための調整可能な仕組みである。

まずは学生が入寮する際に、面接が行われる。ここでは、入寮希望の学生に「あなたは京都「国際学生の家」に対してどのような貢献ができますか？」という問いが投げかけられるという。個人が集団にどのような貢献ができるのか。京都「国際学生の家」における Life Together 実験への参加の意志を問われ、その主体の一員

としての意識を促されるのである¹²。

寮内の公用語は日本語と英語の二言語である。学生へのインタビューからも分かるように、「共同の生」について理解を示す学生や自分の知らない言語を学びたい学生が集うシステムが構築されている。学生が相互に言語を学びたい姿勢や、日本人学生と外国人留学生の人数の割合が、さらには同一の国からの留学生数は3名まで（日本人学生に関しては全寮生の1/3である約10人）と、どこかに偏重した排他的な集団凝集性が働かないような工夫もなされている。

大学寮で生活する留学生と日本人学生の対人関係の課題の一つとして、出口・八島（2008, 44頁）は「日本人学生コミュニティにおける上下関係の実践とそれを基盤とする寮の規範が、同時に留学生を日本人学生コミュニティの外や下位に位置づける行為になってしまっている」ことを指摘した。日本人学生コミュニティの上下関係は、留学生と日本人学生の間の線引きの機能を果たし、両者の集団間の溝が容易には埋まらない要因となる。一方、京都「国際学生の家」では、先行研究に示されたような明確な上下関係はレジデントの間に意識されていないことがインタビューから聞き取られた。京都「国際学生の家」では、日本語と英語の二つの言語が公用語であり、どちらの言語かに優位性が偏っているわけではないため、言語の習得度合いによってリーダーが決まるようなことはないという。また、英語や別言語に切り替えて話すことによって、日本語特有の敬語の使い方が曖昧になり、そこから上下関係の意識が薄れていくという興味深い語りも得られた。

コモンミール（Common Meal）

共に食卓を囲む、つまり「共食」をすることは、どのような社会でも家族や親族、友人関係といった関係性のきわめて重要な部分をなしてきた。文化人類学者で食文化研究の第一人者である石毛直道（1982）は、人間は共食をする動物であることを述べた。外山（2008）は、子どもの発達研究において、その場にある食物を独り占めせずに他者と分配する能力が必要となる共食に注目した。その能力は、食べ物の向こう側にある他者の心を想像すること、つまり自分の分け与えた食物が他者を喜ばせるということをイメージする力であるという。

共食としてのコモンミールの意義は、一つは言うまでもなく、異文化体験・理解にある。各国の料理や個人の宗教的背景や文化的背景、体質等に配慮した料理を作ったり、取り囲んで食事しながら話をしたりする。それは常に濃厚な異文化コミュニケーションとなろう。他方で、それはただ異文化の食事をするだけではなく、他者の心情に思いを寄せることにもつながる。我々が参加したコモンミールにおいても、実際にそれらの様子を垣間見ることができた。例えば、前節（3）に記した、

帰国を控えた留学生と就職を控えた日本人学生とのやりとりである。そうしたコミュニケーションが、居住者に限らず我々調査者らのような外部からの来訪者も含めた共食者に開かれている。

ハウス・ファザーが言う通り、買い物や料理、後片付け、食材の配慮など、コモンミールの様々な場面においてコミュニケーションの機会がうまれる。コモンミールという共食の機会に、他者に思いを寄せたコミュニケーションが活発に行われることが分かる。「食事は人間関係のメディアである」（石毛, 1982, 175頁）ことが実証されているといえるだろう。準備や後片付けといった仕事の量の格差は確かにあるが、「しっかりしている性格の人とか、長く住んでいる人が声をかけてくれたりとかしている気がしますね。」という学生の発言から、その人の状況や性格を考慮する緩やかな関係が学生間で築かれていることが分かる。そのような緩やかな関係が生起する一つの要因として、コモンミールが重要な行事の位置づけになっていることが共食という観点から考察できる。他者と共に生きていくための異文化コミュニケーションの不可欠の配慮と行動が、コモンミールを通じて養われていくのである。

ハウスミーティング

生活上の問題が生じた場合は、定期的で開催されるハウスミーティングで問題を共有し、話し合いによって解決を図るシステムがある。上述の通り、ハウス・ペアレンツは積極的な「指導」は行わない。余程大きな問題が発生した場合は上部組織が介入せねばならないが、通常は最初にハウス・ペアレンツと学生が組織するチームの代表（chair person）らが話し合いをもつ。そして、コモンミールのあとに行われるハウスミーティングで、全員で話し合う。話し合いには学生だけではなく、ハウス・ペアレンツも一緒に参加する。ハウス・ペアレンツは学生と対等な立場であることを意識して話し合いに参加をする。

ハウス・ペアレンツの2人はインタビューの中で、「相手のことは理解できないものですよ」と語っていた。これは、共生を営むうえでの一つのスマートな洞察であると考えられる。「共同の生」の精神に「対決」が想定されているように、共生を目的とした共同生活においては、コンフリクトは未然に防がれるべきものではなく自然なものと見られている。岡本・田中（2011）が述べるように、「多様性の尊重」と「社会の凝集性」の両立することの難しさが共生することにはある。共生は目的（goal）であると同時にプロセスであると考えられる。ハウスミーティングは、そのような共生の一部をなし、そのプロセスに寄与しているといえるであろう。

7. まとめ

本研究は、外国人留学生と日本人学生の間の異文化コミュニケーションを促進する取り組みについて、京都「国際学生の家」をケースに検討・考察した。多文化共生の実現に向けてそこで共同生活を営む留学生、日本人学生、ハウス・ペアレンツへのインタビュー調査から見てきたのは、異文化コミュニケーションを活発化する際に果たされる、〈システム〉と〈第三者〉の重要な役割である。京都「国際学生の家」では、入居時の面接や居住者の方針、共食の機会（コモンミール）がシステムとして駆動し、その環境が学生たちの異文化コミュニケーションを促進する。さらに学生とは異なる第三者としてのハウス・ペアレンツの存在が、学生たちのコミュニケーションを活発にする大きな要素・要因となる。今回のフィールドワークを通じて、そのような分析・考察を行うことができた。

ハウス・ペアレンツは、学生に対して直接指導をするような教育的介入は行わず、時に静観して待ち、時に祖父母—孫や親—子のような関係を取り、時に学生と対等な立場で議論する、多面的関係を築いている。それは、教育者（教師）と被教育者（子ども）から成る伝統的な教育関係とは異なった、一種の教育関係を構築してもいい。本調査からは、外国人留学生と日本人学生の異文化コミュニケーションを促進するには、それを二者間の問題としてのみ捉えるのではなく、〈システム〉と〈第三者〉の存在を方法的に組み込むことや、〈第三者〉が学生と多面的関係を築くことが効果的である可能性が示唆された。特に、コミュニケーション当事者らの交流において果たされるこの〈システム〉と〈第三者〉の機能・役割という視点は、学生間の異文化コミュニケーションの活性化を図りたいと考えている日本の大学（調査者らの属する兵庫教育大学も含めて）に対して小さくはない示唆を与えることであろう。

註

- 1 京都「国際学生の家」の公式ホームページも参照。
- 2 コーラー氏については、遠藤彰（1989）を参照。
- 3 2022年度版『Year Book』（内海，2023）には次のようにある。「[刊行時の]ハウスマザー（HM）の父（稲垣 博）は、学生時代、広島に原爆が投下された直後に救援に駆け付け、地獄のような状況を目の当たりにするとともに自身も被爆した体験から、コーラ博士の理念「共同の生」を実現するべく、HdBの設立段階から深くかわかり、義母（和子）とともに初代HPを務めるなど、生涯その運営に心血を注いできました」。なお、2016年度版（第41巻）以降のバックナンバーは、京都「国際学生の家」のホームページから閲覧できる

（2024年4月25日閲覧可能）。

- 4 ここに示した①～③の他に、当日はコモンミール後のワークショップにも参加予定であったが、時間の関係で参加することが叶わなかった。ワークショップでは、ドイツ人レジデントがドイツのクリスマスについてプレゼンテーションを行った。後日、その様子をビデオで撮影したものを送って頂き、ワークショップでのコミュニケーションの様子も知ることができた。本稿では検討の対象とはしなかったが、記して感謝したい。
- 5 2021年度版『Year Book』（内海，2022）によると、コロナ禍により定員の半数以上が空室となる事態に陥り、毎月赤字が続いたという。
- 6 当日のコモンミール後のワークショップのテーマは、ドイツのクリスマスであった。註4を参照。
- 7 学生はハウス・ペアレンツを祖父母ではなくお父さん・お母さんのような存在であると述べていた。その両者の見方に差異があることも興味深い。この点において、血縁ではない親子関係を含んだ家族の形態であるステップファミリーや、トランスナショナルな祖父母—孫関係から示唆が得られるであろう。安藤（2020）の研究では、祖父母—孫関係研究が一貫して明らかにしようとしてきたことは、多様性であることを主張している。
- 8 ホームページに掲載されている京都「国際学生の家」の基本理念の一部を抜粋すると次の通り。「Life Together is an adventure and an experiment. “Haus der Begegnung” in Kyoto practices in small dimension a new form of society. This new society is both conservative and revolutionary in that it respects the past with its traditions and looks to the future with its possibilities. It is a form of society which is renewing itself in free self-criticism of its members. The basis of this Life Together is Life itself.」
- 9 「ナナメの関係」については、鈴木聡（2002）も参照。
- 10 この部分の考察は、2024年3月6日に兵庫教育大学において開催された、大人と子供の関係史研究会（番外篇）における白水浩信氏（北海道大学大学院）の報告「教師という特異な〈大人〉とその困難」に拠っている。
- 11 アランがその『教育論（*Propos sur l'Éducation*）』（1932）で述べた次の記述が示唆的である。「教育家（*pédagogue*）」が言った——学校（*école*）とは何か？それは、母親の代わりを勤め（ママ）ようとする、より大きな家庭（*famille*）に外ならぬ。よしそれに到達する希望、いな単にそれに接近する希望すら大してもてないにせよだ。（中略）だが、老社会学者（*sociologue*）は頭を振った。……学校は家庭と対照をなすものだ。そしてこの対照は、子供を、あの自分の上に閉ぢかぶ

さる生物学的な眠りや、家族的な本能などから呼びさましさへするものなのだ。ここには年齢の平等がある、生物学的なつながりはきわめて弱い。……おそらく子供は、かうした鐘や無情な先生によって、愛から解放されるのだ。なぜなら先生は無情であるべきだから。」(Alain, 1932, p.27; アラン, 1949, 43-44 頁)

12 京都「国際学生の家」規約 (House-Rules) には入寮資格が明記されている。(ホームページ参照)

引用・参考文献

- アラン『教育論』水野成夫・矢島剛一訳, 酣灯社, 1949 年;
Alain (Chartier, Émile). (1932). *Propos sur l'Éducation*.
安藤究「近年における「祖父母・孫関係」研究の動向」
家族関係学, 39 巻, 2020 年, 57-68 頁。
出口朋美・八島智子「実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係」多文化関係学, 5 巻, 2008 年, 33-47 頁。
遠藤彰「故ヴェルナー・コーラー教授—その生涯と業績」
基督教研究, 50 巻 2 号, 1989 年, 238-245 頁。
Hasegawa, A., & Shima, C. (2020). Differential social experiences of international students in a residential hall in Japan. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 32 (2), 34-71.
Hennings, M., & Tanabe, S. (2022). Enhancing interaction between international and Japanese students. *Kwansei Gakuin University Humanities Review*, 26, 33-51.
Herbart, Johann Friedrich (1806). *Allgemeine Pädagogik aus dem Zweck der Erziehung abgeleitet*, Göttingen: Johan Friedrich Röwer; (1892). *The Science of Education*, trans. Felkin, Henry M. and Felkin, Emmie, London: Swan Sonnenschein & Co.
兵庫教育大学学生委員会編「第 15 回 (令和 3 (2021) 年度) 学生生活実態調査報告書」兵庫教育大学学生委員会, 2022 年。<<https://www.hyogo-u.ac.jp/visitor/student/jittaichosal5.pdf>>, 2024 年 4 月 25 日閲覧可能。
石毛直道『食事の文明論』中央公論社, 1982 年。
金本節子「地域社会の多文化化と異文化コミュニケーション教育に関する一考察—「多文化共生社会における異文化コミュニケーション」に関するアンケート調査結果を通して」茨城大学人文学部紀要・人文コミュニケーション学科論集, 14 巻, 2013 年, 13-35 頁。
河村美穂「人とヒトが食でつながるということの意味」日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 31 巻, 2018 年, 78-89 頁。
Kersten, M., & O'Brien, T. (2011). A cross-cultural collaborative learning project: Learning about cultures and research methods. *Proceedings of the 44th Hawaii International Conference on System Sciences*. Institute of

- Electrical and Electronics Engineers (IEEE).
教育未来創造会議「未来を想像する若者の留学促進イニシアティブ (第二次提言)」内閣官房, 2023 年 4 月 27 日。<<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/pdf/230427honbun.pdf>>, 2024 年 4 月 25 日閲覧可能。
京都「国際学生の家」ホームページ, <<https://hdbkyoto.jp/>>, 2024 年 4 月 25 日閲覧可能。
Leask, B. (2009). Using formal and informal curricula to improve interactions between home and international students. *Journal of Studies in International Education*, 13 (2), 205-221.
正宗鈴香「寮生活における留学生の異文化社会適応, 人格形成, 言語習得に関する事例研究—国際寮の教育的機能の可能性—」駒澤大学紀要, 98 巻, 2015 年, 63-72 頁。
宮野安治『教育関係論の研究』溪水社, 1996 年。
宮澤康人『〈教育関係〉の歴史人類学—タテ・ヨコ・ナメの世代間文化の変容』学文社, 2011 年。
文部科学省「留学生 30 万人計画の実現に向けた留学生の住環境支援の在り方に関する検討会報告書」, 2014 年 7 月 31 日。<https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/_icsFiles/afieldfile/2014/08/29/1350840_01_1.pdf>, 2024 年 4 月 25 日閲覧可能。
文部科学省「留学生と日本人が混住するシェアハウス型の宿舎」, 2015 年 11 月 30 日。<https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2015/11/30/1364802_07.pdf>, 2024 年 4 月 25 日閲覧可能。
文部科学省「「外国人留学生在籍状況調査」及び「本人の海外留学人数」等について」, 2023 年 3 月 7 日。<https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1412692_00003.htm>, 2024 年 4 月 25 日閲覧可能。
野中響子・奥野雅子「孫・祖父母関係と家族機能の関連」家族心理学研究, 35 巻, 2021 年, 28-40 頁。
岡本智周・田中統治 (編)『共生と希望の教育学』筑波大学出版会, 2011 年。
坂越正樹「第 1 章 いまどのような教育的関係か—ノール教育的関係再考」坂越正樹 (編)『教育的関係の解釈学』東信堂, 2019 年, 3-17 頁。
杉井潤子「祖父母と孫との世代間関係—孫の年齢による関係性の变化—」奈良教育大学紀要, 55 号, 2006 年, 177-190 頁。
鈴木聡『世代サイクルと学校文化—大人と子どもの出会いのために』日本エディタスクール出版部, 2002 年。
出入国在留管理庁「令和 5 年 6 月末現在における在留外国人数について」出入国在留管理庁, 2023 年 10 月 13 日。<https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00036.html>, 2024 年 4 月 25 日閲覧可能。

高橋美能「留学生と日本人学生の間に多文化共生の関係を促進する方策—国際共修授業の事例考察を基に」留学生交流・指導研究, 19号, 2016年, 45-62頁。

田中共子, 畠中香織, 奥西有理「日本人学生が在日留学生の友人に期待する行動—異文化間ソーシャル・スキルの実践による異文化間対人関係形成への示唆—」多文化関係学, 8巻, 2011年, 35-54頁。

外山紀子『発達としての〈共食〉—社会的な食のはじまり』新曜社, 2008年。

上原麻子「日中高等教育機関に学ぶ中国人学生の友人観」大学論集, 40集, 広島大学高等教育研究開発センター, 2009年, 233-250頁。

内海博司「外国人留学生の宿舍支援と「共同の生」—留学生と日本人学生の交流は対等の立場で—」独立行政法人日本学生支援機構, ウェブマガジン『留学交流』9月号, 54巻, 2015年, 24-30頁。

内海博司・村田翼夫・平野克己・蔦田正人・古川千佳・前川佳代子・木葉丈司・Naresh Kumar Verma・村上彩(編)『Year Book』Vol.45, 2020, 公益財団法人京都国際学生の家, 2021年。

内海博司・村田翼夫・平野克己・蔦田正人・古川千佳・前川佳代子・木葉丈司・Naresh Bedi・山本峰丸(編)『Year Book』Vol.46, 2021, 公益財団法人京都国際学生の家, 2022年。

内海博司・村田翼夫・平野克己・山本慶一・前川佳代・木葉丈司・篠山幸子・祝迫美羽(編)『Year Book』Vol.47, 2022, 公益財団法人京都国際学生の家, 2023年。

宇塚万里子・岡益巳・藤本真澄「岡山大学桑の木留学生宿舍の実態と課題—留学生宿舍を教育資源として活用するために—」岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要, 3巻, 2018年, 31-50頁。

宇塚万里子・岡益巳・藤本真澄「岡山大学における留学生宿舍の在り方—国際学生シェアハウスの実態と課題を中心に—」岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要, 4巻, 2019年, 168-185頁。

山川史「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」異文化間教育, 38巻, 2013年, 100-115頁。

横瀬裕紀・鍋島佑基・都築和代「国際学生宿舍で生活を営む大学生の温熱的快適性に関する研究」空気調和・衛生工学会大会・学術講演論文集, 平成30年度大会(名古屋)学術講演論文集温熱環境評価編, 6巻, 2018年, 213-216頁。

吉田千春「留学生寄宿舍から混合型学生寄宿舍へ—教育寮への転換に向けて—」独立行政法人日本学生支援機構, ウェブマガジン『留学交流』9月号, 54巻, 2015年, 9-23頁。

附記

本稿は2023年度兵庫教育大学大学院修士課程専門科目「教育コミュニケーション実践論」における探究活動に基づくものである。

謝辞

本稿の執筆に際して, 多くの方々からご支援とご協力を賜りました。

インタビュー調査においては, 京都「国際学生の家」にご協力いただきました。当日インタビューにご参加いただいた, ハウス・ペアレントのお二方, レジデントの方々には心から感謝申し上げます。本論文には活かすことができませんでしたが, お話を聞かせて頂いたオールド・メンバーや事務監査の方にも感謝申し上げます。

また, 調査実施の手続きや論文作成に関しては, 兵庫教育大学大学院・中間玲子教授に適切なお助言を賜りました。あわせて感謝申し上げます。